

前奏 黙想	祈 禱
讃美歌 216 ああ うるわしき	讃美歌 263 よろこばしき こえひびかせ
祈 禱	献 金
信仰告白 使徒信条 566	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
聖 書 詩編 122:1~19	主の祈り 564
マタイによる福音書 23:37~39	頌 栄 543 主イエスのめぐみよ
讃美歌 304 まことなるみかみを	祝 禱
説 教 『父の家 エルサレム』	後 奏
長崎 哲夫 牧師	

今から 80 年前国民学校 (1941-47 初等教育機関) の生徒になった戦後、初めて手にした聖書は米
国教会贈呈の福音書のピース。その後自分で買った新約聖書は、硬い表紙と裏表紙に囲まれた明治訳
聖書。ということは中身は文語体。「幸福なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり」(マタ
5:3) は暗記した聖句の一つ。忘れられないのは、其処に描かれた陽の当たるオリブ畑の斜面の風
景。それが心に焼き付いていた後年のある時、ガリラヤの「変貌の山」と言われているネゴ山 (マコ
9:2) から地中海沿岸沿「海の道」をバスで南下してエルサレムへの帰途、仰ぎ見た坂の上の「エルサ
レム」を忘れない。

ある時、イエスは山の上にこれと思う者と呼び寄せて、12 名を任命し、使徒と名付けたのは彼ら
ご自身のみ傍に置くため、また派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためだった (マコ
3:12)。以後 12 弟子は主に湖とその周囲の山野で主の弟子として訓練され、次第にエルサレムに近付
く。一行が通った道は恐らくガリラヤ湖 (-212m) からヨルダン川に沿った通称エリコ街道 (川の
道) から次第にエルサレムに近付いた。

前後するが、主イエスは 12 歳の春エルサレムに行かれた。両親が年毎のエルサレムの「過越しの
祭り」に親族、友人、隣近所全てと入り混じってナザレから三日路を賑やかに行かれたのだ (ルカ 2:42)。
エルサレムの祭り (ロマ 12:1 の礼拝は「祭り」の意) は家族、親族、地域、部族、種族を共々エルサ
レムは何時も恵みと平安に溢れていた (ヨハ 12:20)。

ダビデの詩篇 122 は、「主の家に行こう、と人々が言った時、わたしはうれしかった。エルサレム
よ、あなたの城門の中にわたしたちの足は立っている」(都に上る歌—ダビデの詩) と歌う。何故これ
が読者に好もしく慕わしく思われるのか。注意して見ると、本文は「主の神殿に上る」ではなく「行
こう」「行く」で、ごく平易な表現でありながら、多分捕囚されて苦しんでいた巡礼者らが心からの喜
びをもって都に到着し、都を賛美し、その平和のために祈ったのだ。

これはかつてのモーセ時代の巡礼者らの礼拝 (申 16:16) とは全く違う。ここでは、「ダビデの家」
の巡礼者らが礼拝を喜び (ゼカリ 9:9)、自由に献げている。今や「彼らの足が立つエルサレム」はダ
ビデのもとにあり、主の名によって結び合える場所であった。主によって集まる部族も分け隔てなく
一つにされ、その喜びは、主のみ名に感謝を献げる者たちにされた。つまり我々の主の日の礼拝も我
先にではなく全体で助け合い、配慮しあい、思い合って、自分だけでなく、互いに譲り合っただけ
だ。

弟子たちとエルサレムへ向うイエスの姿があった (マタ 20:17)。だが、其処でのイエスの言葉は意
外だった。弟子たちは動揺し。その上 20 節以下は一体何か。エルサレムこそ「律法学者、パリサイ
派の地 (マタ 23:1)、ならば弟子たちは彼等とは関係なかったのか。主の言葉を聞くには、覚悟が要
る。エルサレムこそどんな時代でも、イエスの真実によって、彼らの裏切りにも拘らず主の十字架が
輝き、勝利する場であった (ヘブ 12:22)。(長崎哲夫牧師の説教要約)

本日の礼拝説教、ひさしぶりに長崎哲夫牧師にお願いしました。山本牧師は夏休みです。
8/28(水)1:30~3:00 教会カフェ。カフェの中でマリア・マルタの会をおこないます。裁縫手仕事の
会で、M さんに教えられながら天使ちゃん人形をつくっています。どなたでもご参加ください。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HP は「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。